
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 70. 2025. 1

『千島列島の植物』と『サハリン島の植物』を発刊しました	-----	高橋 英樹	1
北海道大学総合博物館と札幌市博物館活動センターとの「つながり」、そして博物館育て	-----	田中 嘉寛	3
「あなたも私もお世話になるかも知れない後見制度」の講演をきいて	-----	星野 フサ	5
「札幌市博物館活動センター」を訪ねて	-----	宇井 康子	6

特別寄稿

『千島列島の植物』と『サハリン島の植物』を発刊しました

北海道大学名誉教授 高橋 英樹

千島へ

今から30年近く前の1995年8月4日、私が千島列島に初めて上陸したのは中千島ウルップ島のオホーツク海側オトクリティ湾(床丹湾)の砂浜だった。ロシアの科学調査船プロフェッサー・ボゴロフ号で函館港を出航して5日目のことだった。朝9時、ボゴロフ号から上陸用の木製ボートに乗り移り、海上でさらにゴムボートに乗り換える。上陸した海岸にはハマニンニク・ハマエンドウ・ハマナスなど北海道の砂浜で見慣れたものばかりだが、見渡す限り人家はない。ここは日本ではないという意識があるせいか、武者震いするような感情が湧いてきた。このようにして南千島(北方四島)の北方に位置し、カムチャツカ半島まで繋がる中千島・北千島の調査に出かけ始めた。1995年、96年、97年、2000年の4回、日米露3か国による国際千島列島調査(International Kuril Island Project: 略称 IKIP)に参加し、夏の100日以上を千島列島で過ごした。

それは、北大植物園に在職中だった私が「若手」から「中堅」に差し掛かった40歳台前半の頃だった。本州出身の私はやっと北海道の植物に慣れてきたこともあり、さらに北に繋がる千島列島やサハリン島に足を踏み入れたいという気持ちがおさえがなくなっていた。北大植物学の開祖宮部金吾先生(1860-1951)の博士論文は「千島列島のフロラ」だったし、2代目館脇操先生(1899-1976)は若かりし

頃から千島列島植生・植物相をテーマにして、千島列島の多数の島々を渡り歩いていた。館脇先生が提唱した択捉島とウルップ島の間に引かれた植物分布境界線「宮部線」の実態、日本の温帯植物の分布北東限の実際、日本の高山植物のルーツとなった北方植物のありようなど、さまざまな興味が次々と湧いてきた。北大の植物標本庫をさらに充実させなければならないという使命感のようなものもあった。

千島列島とは

千島列島とは北海道とカムチャツカ半島を繋ぎ、北西側のオホーツク海と南東側の太平洋とを画す弧状列島である。北太平洋火山帯の一部をなす火山列島であり、活発な火山活動を行う山や小島・カルデラに彩られ、地震や津波が頻発する地域としても知られる。最暖月と最寒月の気温差が小さく、夏期は湿潤・冷涼で海霧の発生が多く、冬は割合温暖で年降水量もやや多い海洋性気候下にある。特に積算温度と夏の日照量が少ない中・北千島にあっては高木性樹木が生育できず、代わりに低木性ヒース群落が卓越する。

新生代第四紀の氷期には、寒冷期と温暖期の繰り返しに伴う海水面変動の影響を受けて植物は南下・北上を繰り返した。北日本の植物が北方地域(大陸)との移動経路としたのは、千島列島とサハリン島の2大経路だった。サハリン島は氷期にはアジア大陸北東部と北海道を繋ぐ幅広い陸橋として機能し、北東

アジアからの大陸性気候に適応した植物群が利用した一大移動経路だった。他方の千島列島は北東のカムチャツカ半島・アメリカ大陸北西部と北海道を繋ぐ役割を果たす断続的な狭い陸橋で、北太平洋ベーリンジアからの海洋性気候に適応した植物群が利用するこれまた重要な移動経路だった。北日本で見られる北方植物(高山植物)はこれら2大経路に由来する植物群の残存であり、その混合でもある。逆に日本列島の温帯植物からみれば、分布北限・北東限の地がサハリン島・千島列島である。日本の多様な温帯フロラと比較的貧弱な北方系のカムチャツカフロラとの間に位置し、海洋気候に支配され、度重なる火山活動の影響を受けて成立したのが千島列島フロラである。

『千島列島の植物』

2000年まで参加した中千島・北千島でのIKIPから待つこと10年近く、やっと南千島(北方四島)へも足を踏み入れることができた。2009年国後島、2010年色丹島、2012年国後島・択捉島への上陸は、ビザなし交流の枠内での日露学術交流事業の一環の「交流」であり、共同調査ではなかった。それでもこれにより南部・中部・北部の「千島列島」のほぼすべてに上陸した植物学者の一人となり、2015年に『千島列島の植物』(北海道大学出版会)を出版した。2009年のロシアの研究者バルカロフ博士『千島列島フロラ』の後塵を拝することになったがロシア側の見解と比較する上ではよい巡り合わせでもあった。千島列島のほぼ全島に上陸して植生や植物相の全体像をイメージすることができたとし、新標本をそれなりに追加したこともあり、これで千島列島に分布する植物の日露間での分類学的見解の不一致を明らかにし、今後の調査研究の基礎を作れたと思って小さな満足感に浸った。

サハリンへ

日米露共同による国際千島列島調査IKIPの最終年2000年には、後継プロジェクト国際サハリン島調査プロジェクト(ISIP)の予備調査が行われ、私もサハリン南部のトンナイ湖北岸オホーツコエ(富内)でささやかな植物採集をしていた。そしてISIPが2001年から本格始動し、私は2003年までサハリン島の調査に参加した。しかし千島列島でのベッドと電気を享受できる海洋調査船による植物採集や標本乾

燥を行った身には、サハリンの悪路をボロ車で移動しながらのキャンプ生活による野外調査や標本乾燥は快適とは言えず、効率よく進むものでもなかった。千島列島のおよそ5倍はある面積のサハリン島のほんの一部を垣間見たに過ぎず、最も期待していた島北部のシュミット半島には到達できずに撤退した。採集標本点数も千島調査時と比較する気にもならないが、おそらく3分の1程度だろう。このように不完全な現地調査ではあったものの、2015年の『千島列島の植物』に続くサハリン島の植物分類地理の見解(ロシア側の見解と比較できる程度の)も残したいという気持ちが少しずつ湧いてきた。

『サハリン島の植物』

2015年の『千島列島の植物』を出版してから10年近く経った今年になって、ようやく『サハリン島の植物』(北海道大学出版会、2024)をまとめることができた。今回はサハリン島での野外調査が不十分だったこともあり、戦前の日本側の見解である宮部金吾・三宅勉の『樺太植物誌』(1915)や菅原繁蔵の『樺太植物図誌』第1~4巻(1937-40)と戦後のロシア側の見解を比較対照する形でまとめた部分が多くなったものの事実上、戦後初めて日本人が出したサハリンのフロラという事になった。

しかし、日本の郵便局の対応は「ロシアへの国際郵便の差出不可」であり、『サハリン島の植物』をロシアの研究者へ郵送することはできなかった。私の見解は当分ロシア研究者に知られることなく過ぎそうである。まだまだ調査不十分の地域が多いサハリン島においては、これからもサハリン新分布種記録や新分類群の記載がロシア側からなされ、サハリンフロラはさらに改訂されていくだろう。

日本と米国、そしてロシア

北海道に隣接する日本とロシアの国境地域である千島列島とサハリン島。その領有権は政治的立場を異にする日本とロシア間で行ったり来たりしてきたが、その地理的位置は変わることがない。

北大植物学の開祖宮部金吾博士(1860-1951)が学問上の師として仰いだのは米国ハーバード大学のエイサ・グレイ博士(1810-1888)とロシアサンクトペテルブルクのカール・ヨハン・マキシモヴィッチ博士(1827-1891)だった。しかし当分は日米露研究者による国際共同調査が行われることはないだろう。

北海道大学総合博物館と札幌市博物館活動センターとの「つながり」、そして博物館育てへ

北大総合博物館資料部研究員・札幌市博物館活動センター学芸員 田中 嘉寛

札幌に帰ってきました

北海道大学総合博物館資料部研究員の田中嘉寛です。現在はすっかりクジラの化石に魅了されていますが、学生時代はトウベツアカマツセイウチという化石を研究していました。

2024年4月より札幌市博物館活動センターに学芸員として着任しました。本稿では北大総合博物館と札幌市博物館活動センターとの関わりを、昔話とともにご紹介します。

北大総合博物館の化石ボランティア

北大総合博物館の化石ボランティアは主に、化石を岩から取り出すクリーニングチームとレプリカ作成をするチームが活動しています。前者は有名なカムイサウルスや札幌市のセミクジラ化石のクリーニングをした実績があります。後者はレプリカを教育や研究のために作っています。私はこのような化石ボランティアの発展に驚いています。

いまから10年以上前のことですが、化石ボランティアの活動はすでに活発でしたが、もっとこぢんまりとしていました。当時、化石ボランティアの皆さんと私たち学生はレプリカ作りができるようになったらいいなと考えていました。化石ボランティアであった故中野系さんの案内で、同じく化石ボランティアであった故石橋七朗さんとともに、当時まだ現在のNHK 近くにあった札幌市博物館活動センターにレプリカ作りを習いにいきました(図1)。そのレプリカ作りのノウハウが、現在の化石ボランティアに受け継がれています。

札幌市内には北大総合博物館があり、北海道博物館もあります。これらの博物館に関わる人々のつながりを見ると、博物館同士は家族のように思えてきます。私にとって北大総合博物館はホームであり、学生時代からずっとお世話になっている方もたくさんいらっしゃいます。しかもそのつながりは活動的

なつながりです。今現在も、北大総合博物館の化石ボランティアの皆さんとクジラ化石のプロジェクトを進めているところです。



図1 札幌市博物館活動センターを訪れて、レプリカ作りを学んだ化石ボランティアの故石橋七朗さん(右)と故中野系さん(左) 2008年撮影

札幌市の博物館計画が目指すところ

ところで、札幌市博物館活動センターは札幌市の博物館をつくるための活動をしています。具体的には標本をあつめ、研究し、展示を作り、講演会やイベントなど普及活動を行っています。このような博物館活動をとおして、博物館構想の可能性を育てていくということを四半世紀近く行っていますが、目指す博物館建設にはいたっていません。

しかし、すごいクジラの化石が札幌市から見つかっています。この化石に私はかなり期待しています。

札幌市南区からでたセミクジラ化石はすごい

私は目下、札幌市南区から見つかったセミクジラ科化石の研究をしています。これは全長10メートルを超える巨大な化石で、驚くことに頭から尻尾まで、そして肩から指先まで、かなりよく保存されています。世界で一番いいセミクジラ科化石といってもよいものです(図2)。札幌市博物館活動センターに着任して実際に標本をみて絶句しました。これは喜びの絶句です。かなりすごいことです。



図2 素晴らしい保存状態のセミクジラ化石

現在のところ、このセミクジラ科化石がなにかの動物かわかっていません。ですが、驚くほど良い化石であることは明らかです。そのため、学術的な重要性を解き明かすために、まずは研究を進めています。

そしていつかよい展示を作りたいと思っています。なにしろ10メートルを超える巨大な化石です。その大きさをシンプルに体感して「うむむ、面白い！また行こう！」「博物館から帰りたくない！」と思える博物館展示を作りたいと思います。

セミクジラ化石の研究を進めながら、わかったことは逐一、展示や講演会で発信するようにしています。札幌市博物館活動センターはまさに成長中の博物館です。

2024年度は夏にクジラの企画展を、秋にJR手稲駅や水族館 AOA SAPPORO での出張展示を、また秋に常設展の部分更新を、またクジラ化石の解説動画を YouTube で見られるようにしました。

(YouTube+札幌市博物館活動センター)などと検索してみてくださいね。2025年3月1日と2日には札幌駅地下歩行空間でも出張展示を行っていることでしょ。

私は「札幌からすごい化石が見つかったよ！」「札幌は昔、海だったって知っていました？」といったメッセージで博物館文化を発信しています。学芸員はメッセージを発信するだけではありません。みなさんからのメッセージも受け取り、それを力にして「博物館育て」を進めたいと考えています。

2024年10月7日に北大総合博物館主催ボランティア講座&交流会が開かれ、「魅せられて博物館」というタイトルで学生時代に遡って化石と博物館活動のお話をしました。参加された皆さんから札幌市の博物館計画に対する励ましをいただきました。

2024年11月30日、北大総合博物館ボランティアの8人の皆さんが札幌市博物館活動センターを見学しにいらっしました。私の展示解説をニコニコ笑顔で聞いてくださり「クジラ化石すごいね」「博物館出来るといいね」。そして「私たち市民に何かできることがあるだろうか？」などとおっしゃってくださいました。この言葉について私はしばらく考えていました。人と人がつながるとき、声は便利なコミュニケーションツールです。しかし、声は消えてしまいます。思いを形に残すことで、同じ場所、同じ時間に居合わせていない人と人をつなげることが大事だと感じるようになりました。

2024年12月に札幌市博物館活動センター内にメッセージボードを設置しました(図3)。見かけ上、ただのホワイトボードと付箋なのですが、「人々の思いを形にしてくれる重要な仕組み」だと思っています。

まずは札幌市博物館活動センターのホームページ <https://www.city.sapporo.jp/museum/> をみてください。頻繁に更新しています。もし興味がわいたら来館して、そしてメッセージをください。「博物館育て」に参加してみませんか。

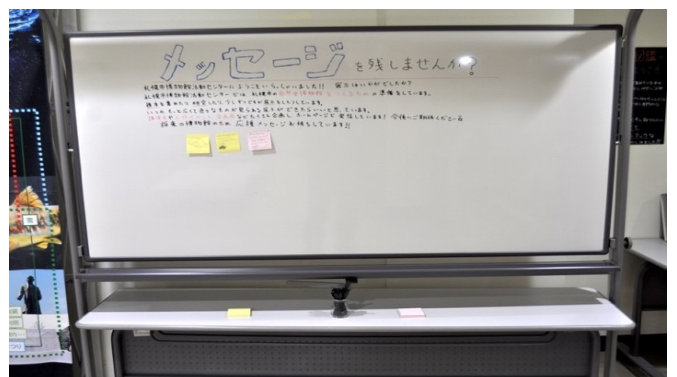


図3 人々の思いを形にするメッセージボード

札幌市博物館活動センターは札幌市豊平区平岸5条15丁目1-6にあり、地下鉄南北線の澄川駅が最寄り駅です。入館無料。



「あなたも私もお世話になるかも知れない後見制度」の講演を聞いて

植物ボランティア 星野 フサ

2024年10月29日(火)北大平成遠友学舎で、札幌後見支援の会の二ツ山政治さんに表題のお話をいただきました。以下に講演の要約を記します。

・私は札幌市公立中学校長を終えた時に、知人を通して家庭裁判所から後見人に選任され、26年間(86歳まで)成人後見人の仕事を引き受けてきました。皆さんの市民生活に助言となるかもと思い、お話しさせていただきます。

・後見制度とは、加齢や障害などにより自分ひとりで物事を決めることが困難な人が安心して生活していけるよう本人に代わって契約をしたり、預貯金・不動産などの財産管理や日常生活のお世話などを行う後見人が家庭裁判所により選任される制度です。

・後見人は少ないので、札幌後見支援の会は、札幌家庭裁判所の調停委員や元職員などが中心となり、後見人不足に対応しようとする会で、会員が後見人となるほか、候補者の育成などに取り組んでいます。

・成年後見実務は東京法務局後見登録課から任命されて行きます。どのような人が任命されるのかというと一般市民です。法科を出ている人が多いとは思いますが、医者出身者もおおり、専門には関係のない一般人の私も後見人を仰せつかっています。もちろん業務内容については秘密です。

・被後見人の何をお世話するのかというと、ご高齢の方が多いため財産の管理をするなどです。息子さんが他の都府県に勤めているということで金銭トラブルになることもあります。財産の管理、口座の管理を私たち後見人が担当しています。

・後見人の報酬は民法862条に従いますが、そこには金額は書いていません。家庭裁判所の判断により、被後見人の資力その他の事情によって、被後見人の財産の中から、適当な報酬が支払われます。

子供の代わりにやっているような感じです。二人で担当するときもあり、記録を文字として残して分担しています。仕事の経過は家庭裁判所へ報告します。

・難しい問題もあるので引き受けたものの退会する人もいます。

・被後見人が亡くなると親族に報告し、役所に行き火葬許可をもらってくることもあります。

質疑応答の一部を以下に記します。

○報酬はいくらですか

被後見人が財産を持っている場合は内規があるようです。持っている財産によって家庭裁判所の判断で決まるようです。

○後見人を依頼する相談の窓口はどこですか。

家庭裁判所です。裁判所に提出する必要な書類をもらえます。この時、代理人にお願いする場合があります。

○俺、オレ、詐欺対策は？

甘い言葉ですり寄られる時、後見人にお願いしているとその対策となります。



左は二ツ山政治さん(札幌後見支援の会)、
右は藤田正一さん(北大名誉教授・平成遠友夜学校校長)

「札幌市博物館活動センター」を訪ねて

第二農場ボランティア 宇井 康子

「博物館に押しかけよう会」は、いつも楽しみにしています。在田先生、委員の皆様、素敵な企画をいつも本当にありがとうございます。今回(第30回)は、「札幌市博物館活動センター」の見学でした。何処にあるんだろうと、札幌市の地図を広げて調べました。先輩の石田多香子さんと南平岸駅で待ち合わせをした後の博物館までの道は私にとっては懐かしい通りでした。というのは、依然母が入院していた関係でいつも通っていた道であり、時には愛車のハンドルを握って深夜の河川敷を走って来たことも。そんな思い出多き道を少し歩きました。

参加者は8名。まず今回解説してくださる学芸員の田中嘉寛さんをご挨拶され、館内の見学が始まりました。最初の部屋はセミクジラの化石です。頭の首の部分で、発掘からクリーニングまで、市民10人に北大総合博物館化石ボランティアも加わり10年の長い歳月をかけてこの姿に。感動です。田中さんは、2018年の北大総合博物館活動報告会で「化石ボランティアでクリーニングしているクジラ化石について」の研究報告をされています。実は、私は2017年6月ボランティア活動申し込みの時、活動希望に第1に第二農場、第2に化石ボランティアを希望していました。その後、ちょっと体調を崩して化石ボランティア室の見学のみになりましたが、もし、その時入っていたら、セミクジラの耳の部分1ヵ所をクリーニングさせていただいたかなと思うと感慨深いものがありました。

セミクジラ室をあとにすると、すぐ昆虫、植物の標本、アンモナイト化石、スタッフ手作りのセミクジラ、サッポロカイキュウ等のぬりえがありその中に気になる文字がコナラの葉っぱで、「ミウラ折りに挑戦してみよう」でした。ボランティアニュース60号に紹介されていた「ミウラ折り」です。次の部屋には「地層の剥ぎ取り標本」があり、ボランティアニュース54号に掲載されていた北大構内の「剥ぎ取り標本」の写真を思い出しました。そして、次の部屋は3D映像の世界へ。子供の頃、普通に目にしていた「日高山脈の誕生」から1億3千年前の海の時代、水、氷の時代、そして、現代の緑の時代、未来へとタイムスリップ。

終了しても頭の中はセミクジラ、ヒゲクジラと海の中を漂っていたのは私だけだったのでしょうか。ぜひ皆さん「札幌市博物館活動センター」に足をこんでいただきたいと思います。玄関に入ると田中さん、スタッフの皆さんが迎えてくれます。そして、充実した楽しい時間が待っていますよ。



札幌市博物館活動センター玄関ホールにて
前列左より3人目宇井康子さん、
右より3人目が田中嘉寛さん

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No.70

- ◆編集人:北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員:星野、今井、久末、山岸)
- ◆発行人:在田一則
- ◆発行日:2025年1月
- ◆連絡先:〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>